

大学生の依存欲求と依存行動について

— 性役割の違いから —

宮本靖子*・恒吉徹三

On dependency need and dependency behavior of university students:
Through the deference of gender role

Yasuko MIYAMOTO・Tetsuzo TSUNEYOSHI

(Received September 26, 2008)

問題と目的

依存に関する研究には、依存の病理的側面を取り扱うものと適応的側面を取り扱うものの2つに分けられる。本研究では、日常場面での依存について扱うため、依存を適応的な視点で捉える。依存の定義はさまざまあるが、竹澤・小玉(2004)の定義に沿って、依存欲求を「情緒的依存、道具的依存の2つの側面からなり、是認、支持、助力、保証などの自己に対する他者の反応や他者の存在自身を頼りにしたいという欲求」と定義する。情緒的依存とは「他者との情緒的で親密的な関係を通して自らの安定を得ること」、道具的依存とは「自身の課題や問題解決のために、他者からの具体的な援助を求めようとする」ということである。

依存との関連で、ソーシャルサポート(福岡, 2003)や適応行動(東, 2003)などについてさまざまな研究がなされているが、男性よりも女性の方が依存欲求は高いという性差が示されることが多い(竹澤・小玉, 2004)。この点について、生物学的な性差よりも性別差つまり性役割の相違によるものと考えられており、また、援助要請を抑制する要因の研究でも、性役割の検討が必要であるとされている(田中, 2002)。しかしながら、依存欲求の程度と性役割との関連については十分に検討されていない。

性役割には、男性性と女性性の2側面があり(Bem, 1974)、生物学的な性とは異なる社会・心理学的性であり、社会や文化によって作られた男性と女性を示している(森永, 2001)。本研究では、男性性、女性性が各々男女に固有の属性ではなく、一人の人間の中にある心理・行動傾向の2側面として捉える。性役割についてのGood & Sherrod(2004)の研究では、多くの男性は男らしさの文化的基準を守るという社会からの要求と自分の内にある女性と男性を区別するという要求に応じようとして、あるいは抵抗しようとしてストレスを経験するとされている。この男性的役割葛藤とストレスは、たとえば、制限された感情(欲求として存在しているても表出が抑制されるという意味)、成功欲求や制限された男性の友情という問題に関わっているとされている。この男性的性役割の研究と依存の先行研究をふまえると、他者に頼るという依存欲求は制限された感情にあたると思われる。したがって、依存欲求を男性的役割との関連で検討する必要がある。

* 山口大学大学院教育学研究科

また、本研究では、依存欲求に加えて、日常場面での依存行動について検討する。先行研究によると、依存行動を依存の自己制御 (self-regulation) のスタイルとして捉えて、表出と抑制の2つの側面から構成されているものとして理解されている (西川, 2001)。この自己制御とは、一般的に自分の欲求や意志にもとづいて自発的に行動調整する力とされ、自己主張的制御と自己抑制的制御の2つの側面があるとされる (柏木, 1988)。自己主張的制御とは、「自分の意志や欲求を明確に持ち、それを他人の前で表現し主張すること」であり、自己抑制的制御とは「集団場面で自分の意志や欲求を抑制・制止しなければならないとき、これを抑制すること」である。例えば、これらの2側面は、頼む、求めるという形で他者に依存する状況や、逆に依存したくても、それを口に出さずに我慢する状況にあてはまる。つまり、依存行動を捉える際には、頼りたいときに頼る「依存表出行動」と頼りたくても頼ることができない「依存抑制行動」という2つの側面から検討する必要性のあることが示されている。また、先ほど述べた男性的役割葛藤から、男性性は、頼りたいという欲求をもっているが頼ることができないという経験を生みやすいと考えられる。つまり、Goodら (2004) がいうように「制限された感情」であり、依存抑制的な側面と関わるものと考えられる。そこで、男性性と依存抑制行動の関連を検討することが必要である。

本研究では、依存欲求および依存行動と性役割との関連性を中心に検討する。特に、性役割の男性性と依存欲求との関連を、「頼りたくても頼ることができない」という依存抑制行動と、「頼りたいときに頼る」という依存表出行動との関連から検討する。

方 法

1. 予備調査

目 的 対人依存行動質問紙の作成。

調査時期 2006年7月下旬に実施した。

調査協力者 A 県内の大学生男性3名、女性2名の合計5名。

手 続 き 個別に実施した。回答は年齢と学年、性別のみの記入を求め、無記名とした。

対人依存行動についての尺度作成のため、「他者への依存エピソード」として、「人を頼りにしたい、援助がほしいという気持ちを口に出して、援助や助けを求めた出来事」(表出エピソード)と「人を頼りにしたり、援助してほしいという気持ちはあっても、それを口に出さず、我慢した出来事」(抑制エピソード)について今までの経験を振り返って、自由記述を求めた。

収集したエピソードと西川 (2001) の対人依存行動質問紙 (Interpersonal Depending Experience Questionair: IDEQ) を参考に依存表出12項目、依存抑制12項目を作成した。

作成した対人依存行動質問紙項目の内容を心理学専攻の大学院生に検討してもらい、24項目すべてが適切であると判断されたため24項目を採用した。

2. 本 調 査

調査時期 2006年10月初旬～11月中旬に実施した。

調査協力者 A 県内の大学生男性82名、女性81名の計163名。平均年齢19.98歳 (SD = 1.89)。

手 続 き 大学の講義時間中、集団形式で行った。加えて、講義時間以外に個別に依頼し実施した。回答はいずれも年齢と性別のみの記入を求め、無記名とした。

質 問 紙

1) 対人依存欲求尺度

竹澤・小玉(2004)の尺度を用いた。20項目からなり、回答は「6:いつもそう思う、5:しばしばそう思う、4:時々そう思う、3:まれにそう思う、2:めったにそう思わない、1:全くそう思わない」の6件法とし、それぞれの項目について、ふだんの自分に最もよくあてはまるものを選択するよう求めた。

2) Bem Sex Role Inventory (BSRI; Bem, 1974) 日本語版

東(1990/1991)による日本語版の尺度を用いた。男性性尺度20項目、女性性尺度20項目、社会的望ましき20項目の計60項目からなる。回答は「7:非常によくあてはまる、6:かなりあてはまる、5:少しあてはまる、4:どちらでもない、3:あまりあてはまらない、2:ほとんどあてはまらない、1:全くあてはまらない」の7件法とし、それぞれの項目について、自分自身に最もあてはまるものを選択するよう求めた。

3) 対人依存行動尺度

予備調査で作成した依存表出12項目、依存抑制12項目の計24項目からなる。回答は「4:たびたびあった、3:あった、2:あまりなかった、1:全くなかった」の4件法とし、それぞれの項目について、今まで経験した頻度について、最もよくあてはまるものを選択するよう求めた。

結 果

1. 尺度の信頼性

1) 対人依存欲求尺度について

対人依存欲求尺度の20項目について因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。因子負荷量の.40を基準として項目を削除し、繰り返し因子分析を行い12項目3因子を抽出した。

第1因子は、自分が困っているときや悩んでいるときに他者と接触することによって情緒的な安心感を得たいという内容の項目であり、『情緒的依存欲求』と命名した。第2因子は、何らかの課題達成のために他者から具体的な援助を得たいという内容の項目であり、『道具的具体的援助依存欲求』と命名した。第3因子は、何らかの決断の際に他者からの具体的な助言を得たいという内容の項目であり、『道具的助言依存欲求』と命名した。

対人依存欲求尺度の信頼性を検討するためCronbachの α 係数を調べたところ、第1因子は $\alpha = .82$ 、第2因子は $\alpha = .71$ 、第3因子は $\alpha = .73$ で信頼性が高かった。

2) 対人依存行動尺度について

依存表出12項目、依存抑制12項目についてそれぞれGP分析を行った結果、すべての項目が適切と判断されたため、それぞれすべてを採用した。

依存表出項目、依存抑制項目について、それぞれ因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。因子負荷量の.40を基準として項目を削除し、繰り返し因子分析を行った結果、依存表出10項目2因子を抽出し、依存抑制9項目2因子を抽出した。

依存表出の第1因子は自分の課題や問題解決のために、他者からの具体的な援助を求めた内容であり、『道具的依存表出行動』と命名した。第2因子は自分の情緒的な安定のため、他者に情緒的で親密な関係を求めた内容であり、『情緒的依存表出行動』と命名した。

依存抑制の第1因子は他者に情緒的で親密な関係を求めたい気持ちはあったが、行動にできなかった内容であり、『情緒的依存抑制行動』と命名した。第2因子は他者からの具体的な援助を求めたい気持ちはあったが、行動にできなかった内容の項目であり、『道具的依存抑制行動』

と命名した。

依存表出行動尺度、依存抑制行動尺度の信頼性をそれぞれ検討するために Cronbach の α 係数を調べたところ、依存表出の第 1 因子は $\alpha = .76$ 、第 2 因子は $\alpha = .73$ であった。依存抑制の第 1 因子は $\alpha = .87$ 、第 2 因子は $\alpha = .83$ で信頼性が高かった。

3) BSRI (日本語版) 尺度について

BSRI (日本語版) の信頼性を検討するために男性性、女性性、社会的望ましさの 3 つを含む 60 項目で Cronbach の α 係数による信頼性分析を行った。男性性、女性性の項目について修正済み項目合計相関を調べたところ、女性性の 1 項目に負の相関がみられたため、1 項目を除外した。そのため、以下の分析は男性性尺度 20 項目、女性性尺度 19 項目で行った。男性性、女性性それぞれについて Cronbach の α 係数を求めた。男性性尺度は $\alpha = .90$ 、女性性尺度は $\alpha = .85$ であり、高い信頼性が得られた。

男性性、女性性それぞれの全体の平均値は、男性性 4.12 (SD = 1.89)、女性性 4.57 (SD = 0.68)であった。これらの平均値を基準に高群 (H)、低群 (L) とに分けた (TABLE 1)。

TABLE 1 男性性×女性性の各群における平均値と標準偏差

性役割	男 性			女 性		
	男性性	女性性		男性性	女性性	
男性性 - 女性性	n	M (SD)	M (SD)	n	M (SD)	M (SD)
H-H	36	5.01 (0.56)	5.25 (0.50)	16	4.60 (0.26)	4.20 (0.24)
H-L	18	4.64 (0.31)	4.10 (0.40)	14	4.59 (0.34)	4.15 (0.31)
L-H	10	3.57 (0.42)	4.89 (0.26)	22	3.46 (0.64)	4.96 (0.39)
L-L	18	3.36 (0.55)	3.93 (0.46)	29	3.33 (0.45)	3.99 (0.48)

2. 性役割と依存欲求の関連について

性役割の男性性の高低、女性性の高低、性別を独立変数とし、依存欲求の各因子 (情緒的依存欲求尺度、道具的具体的援助依存欲求尺度、道具的助言依存欲求尺度) をそれぞれ従属変数とする、3 要因の分散分析を行った (TABLE 2)。

TABLE 2 性役割と依存欲求の関連についての分散分析結果

	df	情 緒 的		道具的助言		道具的具体的援助	
		MS	F	MS	F	MS	F
男性性 (A)	1	0.44	0.43	0.33	0.43	4.27	4.50*
女性性 (B)	1	10.77	10.33***	2.35	3.03 ⁺	2.81	2.96 ⁺
性別 (C)	1	8.06	7.73**	0.15	0.19	0.93	0.99
A × B	1	0.73	0.70	0.15	0.19	0.92	0.97
A × C	1	1.70	1.63	0.44	0.57	0.00	0.00
B × C	1	0.32	0.31	0.03	0.03	0.40	0.43
A × B × C	1	3.07	2.94 ⁺	0.50	0.65	0.30	0.31

⁺p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.005

情緒的依存欲求の分散分析の結果、女性性 ($F(1, 155) = 10.33, p < .005$)、および性別 ($F(1, 155) = 7.73, p < .01$) の主効果が得られ、女性性が低い人よりも高い人の方が、また男性よりも女性の方が情緒的依存欲求が有意に高かった。男性性×女性性×性別の交互作用 ($F(1, 155) = 2.94, p < .10$) が得られ、単純交互作用の検定を行ったところ、女性において、男性性×女性性 ($F(1, 155) = 3.26, p < .10$) に、また女性性の高群において、男性性×性別 ($F(1, 155) = 4.47, p < .05$) に単純交互作用が得られた。さらに、単純・単純主効果の検定を行ったところ、男性において、H-L群よりもH-H群の方が ($F(1, 155) = 5.41, p < .05$)、また女性において、L-L群よりもL-H群の方が ($F(1, 155) = 6.78, p < .05$) 情緒的依存欲求の得点が有意に高かった。H-L群において、男性よりも女性の方が ($F(1, 155) = 3.57, p < .10$) 情緒的依存欲求の得点が有意に高い傾向があり、またL-L群においても、男性よりも女性の方が ($F(1, 155) = 6.80, p < .05$) 情緒的依存欲求の得点が有意に高かった。

道具的具体的援助依存欲求の結果については、女性性の主効果が得られ ($F(1, 155) = 3.03, p < .10$)、女性性の低い人よりも高い人の方が道具的具体的援助依存欲求の得点が高い傾向があった。

次に、道具的助言依存欲求の結果では、男性性 ($F(1, 155) = 4.50, p < .05$)、および女性性 ($F(1, 155) = 2.96, p < .10$) の主効果が得られた。男性性の高い人よりも低い人の方が道具的助言依存欲求が有意に高く、また女性性の低い人よりも高い人の方が道具的助言依存欲求が有意に高い傾向があった。

3. 性役割と依存行動の関連について

1) 性役割と依存表出行動の関連について

性役割の男性性の高低、女性性の高低、性別を独立変数とし、依存表出行動の各因子（道具的依存表出行動、情緒的依存表出行動）をそれぞれ従属変数とする3要因の分散分析を行った (TABLE 3)。

TABLE 3 性役割と依存表出行動の関連についての分散分析結果

	df	道具的依存表出		情緒的依存表出	
		MS	F	MS	F
男性性 (A)	1	0.23	0.75	0.04	0.10
女性性 (B)	1	0.31	1.01	0.04	0.10
性別 (C)	1	0.00	0.01	7.25	16.61****
A × B	1	0.18	0.61	0.07	0.16
A × C	1	0.22	0.72	0.07	0.17
B × C	1	0.74	2.43	1.18	2.71
A × B × C	1	0.88	2.89 ⁺	0.77	1.77

⁺p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.005, ****p<.001

道具的依存表出行動については、男性性×女性性×性別に交互作用が得られ、単純交互作用の検定を行ったところ、男性において、男性性×女性性に ($F(1, 155) = 3.07, p < .10$)、女性性低群において、男性性×性別に ($F(1, 155) = 3.24, p < .10$)、また男性性高群において、女性性×性別に単純交互作用が得られた ($F(1, 155) = 5.31, p < .05$)。さらに、単純・単純主効果の検定を行ったところ、男性においては、H-L群よりもL-L群の方が ($F(1, 155) = 4.39, p < .05$)、またH-L群よりもH-H群の方が ($F(1, 155) = 6.34, p < .05$)、道具的依存表出行動の得点が有意に高かった。H-L群では、男性よりも女性の方が道具的依存表出行動の得点は有意に高かった ($F(1, 155) = 4.45, p < .05$)。

情緒的依存表出行動では、性別の主効果が得られ ($F(1, 155) = 16.61, p < .001$)、男性より女性が情緒的依存表出行動は有意に多かった。

2) 性役割と依存抑制行動の関連について

性役割の男性性の高低、女性性の高低、性別を独立変数とし、依存抑制行動の各因子（情緒的依存抑制行動、道具的依存抑制行動）をそれぞれ従属変数とする3要因の分散分析を行ったが、情緒的依存抑制行動、道具的依存抑制行動ともに、主効果や交互作用とも得られなかった。

4. 依存欲求と依存行動、性役割との関連について

依存欲求の各下位尺度（情緒的依存欲求尺度（I）、道具的具体的援助依存欲求尺度（II）、道具的助言依存欲求尺度（III））と依存行動の各下位尺度（道具的依存表出行動尺度（IV）、情緒的依存表出行動尺度（V）、情緒的依存抑制行動尺度（VI）、道具的依存抑制行動尺度（VII）、性役割（男性性尺度（VIII）、女性性尺度（IX））との相関をTABLE 4に示している。

TABLE 4 依存欲求と依存行動、性役割との相関係数

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
I 情緒的									
II 道具的具体的援助	.43**								
III 道具的助言	.46**	.56**							
IV 道具的表出	.11	.33**	.32**						
V 情緒的表出	.30	.18*	.18*	.44**					
VI 情緒的抑制	.22**	.04	.04	.08	.16*				
VII 道具的抑制	.13	.01	.01	.08	.08	.60**			
VIII 男性性	.02	-.04	-.16*	.04	-.04	-.12	-.08		
IX 女性性	.35**	.20*	.16*	.03	.00	.02	-.12	.40**	

* $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

1. 性役割・性差と依存欲求の関連について

本研究では性役割 (Bem, 1974) を、作動性 (自己主張) と共同性 (対人関係志向) として測定しており、男性は作動性があり、女性は共同性があるというジェンダー・ステレオタイプ

な信念について検討したものとイえる (Kite,2004)。このことから、男性性が高い者は他者からの具体的な助言を求めにくいという結果は、男性性の自己主張という側面が「人に頼らない」ということを表しているといえるだろう。また、女性性と情緒的依存欲求の関連が強いということは、女性性の対人関係志向の強いことが情緒的な人に頼りたいという気持ちに結びついていると考えられる。

情緒的依存欲求のみに性差がみられ、従来の依存研究の結果が部分的に支持された。西川(2001)は、女性は男性よりも心の支えを求めるなど情緒的依存をもつ者が多いことを、また、竹澤・小玉(2004)は、道具的依存欲求よりも情緒的依存欲求において、男性よりも女性の方が依存欲求が高いことを指摘しており、先行研究の結果を支持するものであった。

しかし、道具的依存欲求の面では、性差はみられなかった。この違いは、男性よりも女性の方が情緒的な支えを求めているといえる。さらに、問題解決や課題達成のための他者からの具体的な援助や助言を必要とするような欲求は、性差の観点よりも、性役割差によって、依存欲求の高低が決まるといえる。

2. 性役割・性差と依存行動の関連について

依存抑制行動については、男性性、女性性や性別それぞれとの間に全く関連がみられなかった。しかし、「頼りたくても頼ることができない」という一つの尺度として捉えてみても、女性性に関してのみだが、欲求と行動の2段階でとらえることによって、「頼りたくても頼ることができない」ことを示す結果について示唆されたため、次節で述べることにする。

一方、性別と依存表出行動について、情緒的依存表出行動で強い関連がみられた。男性よりも女性の方が、情緒的依存を表出する行動が多くみられた。このような結果は、情緒的依存欲求において、男性よりも女性の方が高いという結果が、行動面でも表れることを示しているといえる。

3. 依存欲求と依存行動、性役割との関連について

依存欲求と依存表出行動との間に正の相関が大部分でみられたことは、「人に頼りたい」という欲求と「人に頼る」という行動のつながりが成立していることが示されているといえる。しかし、女性性の高い人においては、頼りたい欲求は強くとも、行動として多く表出するとはいえないことが示唆された。女性性の関係志向性の高さが人との関わりを求めるために人に頼りたいと思うとしても、それが行動には結びつかないのである。「欲求」と「行動」の両面で捉えると、「頼りたくても頼ることができない」という依存抑制を起こしているといえるであろう。また、依存の「欲求」と「行動」との違いの要因については、今後さらなる検討が必要である。

さらに、「情緒的」な側面では、頼りたい欲求をもっているにもかかわらず実際に頼ることができず、頼ることができない状況がさらに頼りたい欲求を高めることが示唆された。また頼るという行動をとる反面、頼りたくても頼ることができないこともあり、西川(2001)が検討しているように、依存の表出と抑制は、一次元上の高低で捉えるよりも、表出と抑制の2次元で捉えることが有効であることも示唆された。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的であった性役割と依存欲求、性役割と依存行動の関係については、特に男性性、依存抑制行動に注目して分析を行った。しかし、依存欲求の一側面の他者からの具体的な助言を求めるような欲求においてのみ、男性性が低い者が依存欲求が低いという結果を得ており、性役割の男性性よりも女性性の方が依存欲求との関連が大きくみられた。本研究での依存が、対人依存を表し、女性性が対人関係志向を測定していることから (Kite,2004)、女性性と依存欲求の関連が強くと考えられる。

「頼りたくても頼ることができない」という依存抑制行動と性役割との関係について特に検討を進めたが、明確にすることはできなかった。この「頼りたくても頼ることができない」という葛藤のある心の状況を行動という一つの尺度としてではなく、欲求と行動の段階に分けて考えるなど、「頼りたくても頼ることができない」ことの測定の工夫が必要であると考えられる。また、本研究では依存対象を特定しなかったが、依存対象を特定することによって、調査協力者が対象に対する依存について具体的に考えやすくすることも必要である。

今後の課題として、人に頼るということを望ましくないと考えるために、質問紙において、抵抗やためらいが生じる可能性も考えられるので、この点を考慮した質問方法を工夫することや、面接調査などの質的研究を含めて依存を検討する必要があると思われる。

付記：本論文は、宮本靖子が山口大学教育学部に卒業論文として提出し、その一部を中四国心理学会第63回大会において宮本が発表したものに、加筆修正したものである。

引用文献

- American Psychiatric Association (1994) : Quick reference to the diagnostic criteria from DSM -IV. Washington,D.C.: Author. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (編著) (2004) : DSM -IV- TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版, 医学書院, 687-691.
- American Psychiatric Association (1994) : Quick reference to the diagnostic criteria from DSM -IV. Washington,D.C.: Author. 高橋三郎・大野裕・染谷俊幸 (編著) (1996) : DSM -IV精神疾患の診断・統計マニュアル, 医学書院.
- 東清和 (1990) : 心理的両性具有 I - BSRI による心理的両性具有の測定, 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), **39**, 25-36.
- 東清和 (1991) : 心理的両性具有 II - BSRI 日本語版の検討, 早稲田大学教育学部学術研究 (教育・社会教育・教育心理・体育学編), **40**, 61-71.
- 福岡欣治 (2003) : 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャルサポートの影響, 対人社会心理学研究, **3**, 9-14.
- 東理恵 (2003) : 大学生の依存性と適応行動との関係に関する研究, 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, **5**, 215-221.
- 柏木恵子 (1986) : 自己制御 (self-regulation) の発達, 心理学評論, **26** (1), 3-24.
- 森永康子 (2001) : 女性と男性は違うのか—フェミニスト心理学からの考察—, 女性学評論 (神戸女学院大学女性学インスティテュート研究), **15**, 23-35.
- 西川隆蔵 (2001) : 対人依存行動の研究—自己制御の観点からの依存行動の類型化の試み—, 帝塚山学院大学人間文化学部研究年報, **3**, 1-19.
- Good, G.E. and Sherrod, N.B. (2001) : The Psychology of Men and Masculinity :

- Research Status and Future Directions. Unger,R.K. (Ed), Handbook of the psychology of Women and Gender, John Wiley, New York. : 森永康子・青野篤子・福富護 (監訳) (2004) : 女性とジェンダーの心理学ハンドブック, 北大路書房, 240-255.
- Kite ,M.E. (2001) : Changing Times,Changing Gender Roles : Who Do We Want Women and Men to Be ? . Unger,R.K. (Ed), Handbook of the psychology of Women and Gender, John Wiley, New York. : 森永康子・青野篤子・福富護 (監訳) (2004) : 女性とジェンダーの心理学ハンドブック, 北大路書房, 256-271.
- 高橋恵子 (1968) : 依存性の発達的研究 I —大学生女子の依存性—, 教育心理学研究, **16**, 1, 7-16.
- 高橋恵子 (1970) : 依存性の発達的研究 III—大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性—, 教育心理学研究, **18**, 2, 65-75.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004) : 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討, 教育心理学研究, **52**, 3, 310-319.
- 田中泉 (2002) : 援助要請の意思決定過程における性差要因について—援助要請を抑制する要因の研究 II —, 関西大学大学院『人間科学』, **56**, 139-154.
- 田中優・高木修 (1997) : 中学生における社会的依存要求の特徴について, 社会心理学研究, **12**, 3, 151-162.